

最終議論「セミナーリウム」とは何か —水島ゼミ、民主政、そして立憲主義—

2022年11月25日 小崎瑤太

25年続いた水島ゼミも最後の回を迎えました。最終回でやりたいのは、水島ゼミとはどういう場（環境、機会…）なのか、議論することです。かなり漠然としていると感じられるかもしれませんが、身近過ぎて今まで改めて考えることができていなかったテーマではないかと思い、もうこの機会しかないので挑んでみようと考えました。

ゼミの語源は seminarium（苗床）です。『苗床』から育つ種はみな個性豊かで、一つとして同じ種はない。¹ 私たちはそんな苗床で育ってきました。そして24代にも及ぶ先輩方もここで育ち、それぞれの道へと踏み出して行ったのです。しかしそんな苗床に、ここ数年は新型コロナウイルスという新たな脅威が立ちはだかりました。感染それ自体の危険性もさることながら、人と人とを切り離してしまう〈social⇔distancing〉による議論の縮減。コロナ前のゼミを知らない私にとって、「水島ゼミにおける議論とはなにか」という問いがこの2年間における最大の問題でした。さらに今年に入って、世界は安全保障の「危機」に直面し、「わかりやすい答え」に群がる人々の姿を目にしました。こうした中でもなぜ私たちは議論をするのでしょうか。どうして自分とは違う意見に出会うことができたときに、熱くなれるのでしょうか。この25年間、テロ・震災・戦争など様々な事象を目にしながら、先輩方はどのように議論を続けてきたのでしょうか。わかりやすい答えや自分と同じものばかりを追いかける社会にはないものが、このゼミにはある。それはなぜなのでしょう。

以上のような問題意識を踏まえて、発表よりもむしろ、議論を中心に据えたいです。卒業生への取材とその時々々の社会情勢の分析、そして現在のゼミと社会との関係などを対象にしようと考えています。二度の革命を目の当たりにしたギュスターヴ・ル・ボンは群衆の恐ろしさを『群衆心理』で述べていますが、そこで展開される群衆批判は現代の民主政にも当てはまる場所があります。民主政の中で膨張した「群衆」の力は立憲主義や国際法システムの軽視へと向かいつつあるようです。なぜ議論なのか、なぜ他者と共に考えるのか、なぜ現場行くのか。こうした基本的な問いに立ち返ることが、まさに今求められているように思っています。

上記のように考えていますが、最終回ですので、みんなで相談しながらテーマを大きく変えるのもあります。むしろその方がいいかもしれません。最終回だから、というより、最終回に向けて考える、そのプロセスそのものも含めてゼミなんだろうと思います。班員にならなかった皆さんとも、協力して作り上げていきたいです。よろしく願いいたします。

¹ 水島朝穂「雑談（31）セミナーリウム（苗床）物語 2004年1月19日」『平和憲法のメッセージ』<http://www.asaho.com/jpn/bkno/2004/0119.html> [2022/11/21 最終閲覧]

参考文献

ギュスターヴ・ル・ボン『群集心理』 櫻井成夫訳（講談社、1993）

水島朝穂「雑談（31）セミナーリウム（苗床）物語 2004年1月19日」『平和憲法のメッセージ』 <http://www.asaho.com/jpn/bkno/2004/0119.html> [2022/11/21 最終閲覧]